

法前仏後の人法一箇

廣田 頼道

(はじめに御断りしておきますが、法前仏後という言葉は、法が先で仏が後という言葉の概念を短かく示した言葉であつて、新造語とか、大聖人の御言葉にないという議論でなく、何をいわんとしているかという点で考えていただきたいと思ひます。)

ある時、若い御信者さんから

「仏と法はどっちが先にあつたんですか。」

と聞かれた。私は、

「あなたはどつちが思ひますか。」

と、そのまま問い返すと、その方は、

「人法一箇ということですから、同じでしょう。」

と、返事をしてくれた。

入信してから、そのように教そわつたから、日蓮正宗ではそうなんだと決めこんで、その奥を考えようとはしない。にもかかわらず時折、心の中で、なんでかなあーという葛藤が湧いて、その結果、私にそういう質問をして来たのだと思つた。つまり、自分では納得出来ないのに、そういうことになつてゐるらしいから、そういう風

に思つておこうという無理である。

話しは変わるが、私が小さい時、牛乳屋さんには、本物の麦ワラで作つたストローが食堂の割箸のような恰好で置いてあつた。軽くて途中が裂けてゐると、吸つても吸つても牛乳が口にととかず、新しい物に換えてもらつた。今様のビニール製の物などなかった。後年、中学生になつて英語を習つた時、ストローとは麦わらだと知つた。なるほどと思つた。

今の子供にストローが麦わらだといつても、何故ビニールが麦わらなのかという所から話しをしなければいけないことになつてしまふ。

学校のような所で教えてくれる知識というものは大旨おもしろくない。それは自分というものにははじめから断りもなく、こうと決まつているからという、通達命令をただだけだからと私は思う。自分では納得出来ないのに、そういうことになつてゐるらしいから、そういう風に思つておこう……には、根源的な喜びはなく、人に伝えてその喜びを分ちあいたいという感激もないということになつてしまふ。理由と整合性に人をつき動かす感動が共なるのではないだろうか。

出来る限り、決つてゐると思はれてゐることであつて

も、根っこの根っこから疑ってみて、心の底からの納得と喜びを感じ、どんなに信心を亡くそうとする魔が競い起っても、根っこの信心は消滅しない。そういう信心を、私はして行きたいと思っています。そうでなければ造次顛沛に題目を唱えるなど出来ないことであります。

法（妙法）妙なる不思議な法・作爲的なものではなく自然のあるがまま（無作）の真理）が、森羅万象と共に大前提としてまずあって、その法を修行によって悟る（覚る）感得めざめる・諦らめる）を仏。迷うを凡夫と云うのであります。

仏がいて、その後には法があるということは間違いであります。又、仏と法が同時に存在したということも間違いであります。

仏陀のことを別名覚者といいますが、これは法にめざめた者という意味で、法が前になければ、めざめられるわけもないし、仏陀の生誕もないわけであります。

譬えていえば、今から三百年ほど前万有引力の法則（法）をニュートン（ここでは仏にたとえます）が発見したことによって、

全ての物体の間に作用する引力。その大きさは質量の

積に比例し距離の二乗に反比例する。”

ということが解明され、今迄あたり前だと思っていたけれども、皆んなが地球にへばりついて生活しているということが理論的に明らかになり、その法則を万端に渡ってあてはめ利用することが出来るようになったのであります。

それでは、ニュートンが法を発見するまでは、この法は無かったのか？ 誰もこの法を享受することが出来なかったか？ というと、知らなくても、世の中の人類物体は皆この法則によって生活を営んでいたのであります。ただ、知らなかった為に、無駄な時間を費したり、失敗をしたりということとは当然あつたはずであります。エジソンが発見発明したもので、モウツアルト・シューベルトが作曲した名曲でも、ドレミの組合せといえは身も蓋も無いこととなつてしましますが、誰もが考えることの出来ない組み合わせの妙によって、現代人の魂をもゆさぶり続けるわけですから、何十億の地球上の人間の中のたった一人がそれに目覚め、諦め、取り出した人物から受ける恩恵というものは、考えられないほど多大なことなのであります。

十界互具・一念三千の法も、仏が世に出る前から、四

十六億年前の地球発生以前、銀河系宇宙の発生以前から元来、永遠に存在している法なのであります。三億九千七百万年前に、やっと人間の様な動物が地球に棲息するようになります。

動物は年老いて肉体的にだんだん弱って病気になる、やがて死を迎えます。しかし人間は一般の動物と違って、肉体的にはまったく同じ衰弱を辿っていても、精神的・人格的・文化的に成長を続け、死んだ後も、精神的、物質的共有の財産として、それを引き継ぎ、増幅していくことが出来るのであります。この様な生命を得たにもかかわらず、人間は畜生として、単純に自からの欲望を主張し合い、奮い合い、傷つけ殺し合い、人間としての悟るべき道を閉して欲望の趣くままに生きていた為に、仏は真の目的を教え与え、誰もが仏になれ、仏であることを伝える為に、この世に出世の本懐の法を示す為誕生したのであります。

仏は衆生にそのことを伝える為にも、自からの生き方、肉体、生涯を通して、仏でない自分が仏になって行く姿を手本として示さなければならなかつたのであります。故に神を標榜する教えにおいては、神ははじめから神です。が、仏は、仏でないものが修行によって仏となるとい

う、修行というものが必要不可欠であることを明確に示しているのであります。

キリスト教にしても、天照太神に代表される国家神道の神々にしても、アラアの神にしても、それらの神は必ず天地創造を主張し、森羅万象を創造所有することを教えとした、道理はずれの増上慢であります。

一方、仏は、生命は、生命と生命の結びつきによって生れたもので、仏が作ったものでも誰が作ったものでもない。誰もが仏になれ、仏であることを一念三千の法によって示したことを旨とし、森羅万象に、永遠にして共通・共有する法は妙法蓮華経であり、この法を信じ修行することによって、仏となれるということを教えた。強いていえば、その道しるべとしての名付親であります。

至理は名無し聖人理を觀じて万物に名を付くる時、因果俱時・不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華経と為す此の妙法蓮華経の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は仏因・仏果・同時に之を得るなり、聖人此の法を師と為して修行覚道し給えば妙因・妙果・俱時に感得し給うが故に妙覚果滿の如来と成り給いしなり

「当体義抄」(全513P)
覚者(感得者)とは、法と自分が一つになった。つまり

人法一箇にならなければ、なれないことであります。

仏の存在が無ければ、法そのものを知ることが出来なかつた衆生にとって、仏の偉大な存在に対する尊敬のあまり、仏がいなければ法はないと同じだからという、仏を中心に物事の全てを考える。

『仏前法後』

の理解があたり前の様に浸透してしまふのであります。たしかに一面においては、そういうことが言えますが、法がまず前提としてあり、仏が主人の様に、親の様に、師匠の様に佛自からが感得したものを衆生に知らしめる為、受持させる為に出世する。

『法前仏後の人法一箇』

でなければ、仏の説く教えの道理から外れてしまふのであります。もちろん、前だから勝り、後だから劣るということではないのであります。

法前仏後の人法一箇と理解することによって、

○法よりも仏の方が重要。

○仏と法は一箇だから同時に存在しなければおかし。

○仏法というくらいだから、仏の説いたことのみが法

であつて、それ以外は法でない（教条主義）

こういう曲解を整理し整合制のある道理に置き換えなけ

ればいけないのであります。右の考え方を延長して行けば、必ず、キリスト教や天照太神と同じ様な、仏を天地創造仏に祭りあげる危険があるからであります。現に、仏が天地を造つた、仏と衆生は主従関係で、仏が一切衆生を救つてくれるとイメージして信仰を考えている人もたくさんいるのであります。

日蓮はいづれの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず。 「妙密上人御消息」（全129P）

の御教示は、一切衆生成仏の法を顕本し、伝えなければ、この法は、我が所有物にあらず、我が創造發明物にあらず一念三千の森羅万象にもとあつて、あなたにもそなわつてゐる法です。ということを端的に示しているのであります。

聖人の唱えさせ給う題目の功德と、我等が唱え申す題目の功德と、何程の多少候べきや、と云々更に勝負あるべからず候。其の故は愚者の持ちたる金も、智者の持ちたる金も愚者の然せる火も智者の然せる火も其の差別なきなり。但し経文の心に背きて唱えば其の差別有るべきなり。 「松野殿御返事」（全138P）

画木に魂魄と申すたましいを入るる事は法華経の力なり天台大師のさとりなり、此の法門は衆生にて申せ

